

「和光市史 平成版」のレイアウト案について（説明書）

ご提案の組見本は目次構成の大項目「和光市の平成をたどる」中の「1 昭和の終わりから平成の時代へ」の部分で、昭和 62 年と平成元年に当たります。

本書の基本の組パターンをご検討いただくためのサンプルとして、下記のとおり作成しましたので、ご検討くださいますようお願いいたします。

◆レイアウトの説明

- ・各年見開きで展開し、本文は読みやすさを考慮し、14Q（10 ぽ大）の明朝体とした。
- ・23 字×27 行×2 段を基本ベース（1 頁当たり 1242 文字）とし、下段のスペースに写真等を配置することを基本パターンとした。
- ・本文が明朝体なので、年表は変化をつけてゴシック体とした。

【レイアウトの特徴として】

- ・全体として、窮屈にならないよう配慮し、原則写真等は下段に配置するが、本文との兼ね合いで、上部にも小さく配置し、誌面に変化を持たせることとした。
また、「和光市の平成をたどる」3 4 年分の全体にも変化を持たせるため、写真の割合を増やすページを設けることも考える。
- ・柱的機能とともに、読者の検索の便のため、右上の「和光市の平成をたどる」（中扉の大項目）と「1 昭和の終わりから平成の時代へ」は、見開きごとに挿入することとした。
- ・難しい用語には、できるだけ解説（脚注）を付すこととする（グリーンサンド）。

◆本文テキストの説明—執筆に当たってのコメント

- ・「和光市の平成をたどる」の各見開きは、和光市の平成とはどのような時代だったのかを浮き出させることを目的とする。
- ・ビジュアルスペースとの関連から、おおむね 1 年当たり原稿用紙 2～3 枚前後とコンパクトな展開とする。
- ・その中でも歴史の流れ、その年の特徴を印象的に伝えるため、メリハリの利いた文章とする。
- ・各年の国内外の状況を適宜記述し、和光市の動きとできるだけリンクさせる。
- ・「和光市の平成をたどる」の各見開きで全てを伝えることはできないが、後のページの「和光市の現在（いま）をうつしだす」と併せて読むことで、全貌が分かるような展開とする。
- ・原稿用紙 2～3 枚前後とコンパクトな展開であるため、必要に応じて注釈を加え、読者が読み進めるための助けとする。